

憲法と映画(106)『入国審査』 (スペイン)

<かな>

7月に10日間ほどカナダ・トロントに夫婦二人で出かけました。海外旅行は十数年ぶりのこと。手続きのほぼすべてをカナダ在住の娘におんぶにだっこだったため、この映画のように入国審査で引っかかることもなくスムーズに入国できたので英語が話せなくても何も問題はありませんでした。

事前に電子渡航認証(eTA)の申請が承認され、航空券を予約して搭乗の 24 時間前にチェックインを済ませていれば、入国時にパスポートを機械でスキャンしてタッチパネルの質問事項(日本語)を入力すればフリーパスで入国できるんですから楽になったものです。移民の国カナダだからでしょうか。

ところがこの映画の主人公二人はスペイン・バルセロナからアメリカへの移民で来たのだからそう簡単ではありません。しかも事実婚の男性がベネズエラ出身であることが判明してさらに話がややこしくなるのです。おりしも第一次トランプ政権下における中南米からの不法移民に神経を尖らせメキシコ国境政策強化のニュースが流れるからなおさらです。きっと入国審査官もピリピリしていることは想像に難くありません。

別室に連行され二人は引き離された上に、根掘り葉掘りプライベートなことまで質問され、男性には事実婚の彼女の他に今は別れたとはいえ婚約者がいたことが分かります。勿論彼女は初耳で二人の関係に危機が訪れます。アメリカへのグリーンカードの抽選で移民ビザに当選しているのが彼女だけというのも入国審査を一層厳しいものになります。

上映時間は77分と普通の映画に比べると短いですが、密室劇なのでそんなに製作費は掛かっていないのに他人事とは思えず最後までハラハラさせられるサスペンス仕立てになっています。アツと驚く結末は映画をご覧になってからの楽しみということで…。

